

ロレンス・スターンの説教と『トリストラム・シャンディ』における

sensibility の可能性

久保田裕紀

牧師兼業作家であるロレンス・スターン (Laurence Sterne, 1713–68) について、18 世紀中葉の読者や日本における夏目漱石はスターンのフィクション作品と説教の落差を強調する。他方、フロリダ大学出版局版スターン全集を筆頭とする近年のスターン研究はこれらのジャンルを相互参照させてきた。『トリストラム・シャンディ』(The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman, 1759–67) と説教を比較する参照点となるのが、たとえば感受性 (sensibility) の思想である。17 世紀後半の国教会神学において苦しむ他者にたいする同情、共感として基礎づけられた感受性の概念をスターンは説教のなかで度々主題とするが、『トリストラム・シャンディ』においてこれを説教のまま打ち出しているわけでは必ずしもない。後者に顕著なのはむしろ苦しむ当事者の身体感覚として現れる sensibility である。本稿は説教と『トリストラム・シャンディ』のあいだで sensibility の相違を検討し、スターン以降に流行る感傷 (センシビリティ) の文学で失われる sensibility の当事者性を『トリストラム・シャンディ』が喜劇的に追求している可能性を考察する。

感受性の宗教——説教における sensibility

18 世紀後半に大きく流行する感傷文学における sensibility とは「他者の苦痛は苦悩への同情、共感」を指す。この概念は 17 世紀後半の国教会広教派 (Latitudinarian) の神学から、つまり反カルヴィニズムと反ホップズという思想的土壌から生まれた。¹ 名誉革命を経て王位継承にもなうカトリック復帰の危機を脱し、同時にイングランド国内の分裂したプロテスタント諸派を統合しようとした国教会にとって、感受性の概念は宗派の違いよりも人間のごく基礎的なレベルで共通点を探るものといえる。17 世紀末にカンタベリー大主教を務め、18 世紀国教会牧師の範となったジョン・ティロットソン (John Tillotson) は、他者の苦痛に共感する性質を humanity であるとし、共感的な感受性を人間性とみなす感受性の神学を構築している。

説教執筆を通じてティロットソンを摂取したスターンもまた、「ヨセフの物語再考」や「博愛の勧め」といった説教で sensibility を例証している。苦悩する他者への自然な同情を核とする感受性が特権化される神学的根拠はキリストの受難にある。キリストの死を感受性の文脈で解説した説教「エリヤとザレパテの実例を考える」において、スターンは「進んであらゆる苦痛を耐え、自身を犠牲にして利害をも放棄し、人類のために命を捨てた」キリストを「同情の比類ない例」とであると説く。² キリストの受肉と受難という基本教義に感受性を認め、これと同様に人間にもそうした同情や博愛の本性が授けられているという理解こそが感受性の基礎にある。感傷文学における sensibility からこうした神学的前提は脱臭されていたが、人間を憐れむ神が発揮したような sensibility は「苦しむ他者を憐れむ自己」として反復された。このジャンルの精華ともいべきヘンリー・マッケンジー (Henry Mackenzie) による『感情の人』(The Man of Feeling, 1771) には、主人公がロンドンの精神病院ベドラムを訪問する挿話がある。³ 主人公によれば、鎖につながれた狂わんばかりの患者の悲惨を目にするだけで、患者に手を施すこともできない事態は慈悲深い (humane) 人間にとって苦痛だという。この主人公にはたしかに感受性が認められるが、人間を憐れんで自らを犠牲にしたキリストという sensibility の神学的起源を想起すれば、憐れむ／憐れまれるという彼我の区別が解消されることはない。⁴ すなわち感受性を発揮する者は苦しみの当事者ではありえず、「感情の人」は他者の苦しみから絶対的な距離を保っている傍観者なのだ。鎖によって患者と観光客が隔てられるベドラムは sensibility の限界を象徴していると言えよう。

悲惨から身を守る——『トリストラム・シャンディ』と身体感覚

『トリストラム・シャンディ』における「感情の人」といえば主人公の叔父トウビー (Toby) であり、彼が同宿の軍人を看取る「ル・フィーヴァーの話」はその好例である。臥せるル・フィーヴァーの世話をし、彼の息子の将来も保証してやるトウビーの感受性は、しかし挿話の最後になって病人の消えゆく心音によってかき消される。⁵ トウビーの感受性を茶化すようにクローズアップされるル・フィーヴァーの鼓動は、まもなく事切れる人間に残された身体感覚の最たるものである。このエピソードが示すように、『トリストラム・シャンディ』で sensibility が機能しているとすれば、それは他者の苦しみを憐れむ傍観者の感受性ではなく、苦しむ当事者の身体感覚としてなのだ。

スターンは苦しみの当事者の身体感覚をスローモーション的に再現する。たとえば主人公トリストラムが自分の苛立ちを収める方法について開陳する際、そこで活写されるのはストレス解消のために放り投げた鬘の跡

を追う自身の視線である。またトリストラム「割礼」のエピソードでも、焦点化されるのは阿鼻叫喚をあげる主人公ではなく、息子の英才教育計画が頓挫した父ウォルター (Walter) である。失意のウォルターは、古今東西の割礼について記された文献を手を階段を昇り降りしながら額をこする仕草が描かれる。実況中継にも似た描写は、本を紐解きながら階段を行き来するウォルターの身体感覚を追体験させる効果を挙げている。こうした身体感覚の緻密な再現は、出産に際して息子の鼻が潰れたと聴かされるウォルターの描写でも見られる。ここで集中的に描写されるのはウォルターに同情するトウビーではなく、失意から立ち直ろうとして「準備運動」をするウォルターの四肢や咳ばらいである。シャンディ家はたしかに互いにたいする同情や共感で結びついている。だが彼らの感受性が発揮されるべき「苦しみ」の描写で焦点化されるのは苦しむ人の身体感覚であって、周囲がもたらす憐憫の情ではない。『トリストラム・シャンディ』のばあい、「感情の人」は「苦しむ人」の身体感覚 (sensibility) を再現する極度にスローな身体描写に取って代わられている。

「感情の人」と「苦しむ人」——苦しみの主体をめぐる

説教における sensibility は他者の苦しみに同情する心的作用であり、ここには苦しむ他者を見る自己はその苦しみの当事者たりえないという含意がある。一方、『トリストラム・シャンディ』における sensibility とは苦しむ当事者の身体感覚を意味する。こうした sensibility の相違は、説教と『トリストラム・シャンディ』あいだでスターンが「人間は不合理だ」とする人間観を根本的に書き換えていることからわかる。人間の本質として共感的感受性があると指摘する説教「博愛の勧め」で、スターンは

No, there is a secret shame which attends every act of inhumanity not to be conquered in the hardest natures, so that, as in other cases, so especially in this, many a man will do a cruel act, who at the same time would blush to look you in the face, and is forced to turn aside before he can have a heart to execute his purpose.

Inconsistent creature that man is! who at that instant that he does what is wrong, is not able to withhold his testimony to what is good and praise worthy.^{vi}

と述べ、神学的感受性がどの人間にも備わっていると訴える。しかし、下線が示す人間観は『トリストラム・シャンディ』においてまったく異なる意味をもつ。

——Inconsistent soul that man is!—languishing under wounds, which he has the power to heal!—his whole life a contradiction to his knowledge!—his reason, that precious gift of God to him—(instead of pouring in oyl) serving but to sharpen his sensibilities,—to multiply his pains and render him more melancholy and uneasy under them!—poor unhappy creature, that he should do so!—are not the necessary causes of misery in this life enow, but he must add voluntary ones to his stock of sorrow[.]^{vii}

ここでの「人間は不合理だ」は苦しむ人が抱える苦痛のメカニズムを要約したもので、人間は「癒すことのできる傷に喘ぐ」矛盾した生き物だとスターンは言う。これはすなわち「人間は不合理だ」とする人間像が共通する説教と『トリストラム・シャンディ』のあいだで、苦しみの主体が反転しているということに他ならない。『トリストラム・シャンディ』は「苦しみを憐れむ人」から「苦しむ当事者」へと苦しみの主体を反転させることで、sensibility を「感情の人」の感受性から「苦しむ人」の身体感覚へと変化させているのである。

ⁱ G. J. Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain* (Chicago, IL; London: The University of Chicago Press, 1992). および Norman S. Fiering, 'Irresistible Compassion: An Aspect of Eighteenth-Century Sympathy and Humanitarianism', *Journal of the History of Ideas* (University of Pennsylvania), 37:2 (1976), 195–218. を参照。

ⁱⁱ Laurence Sterne, 'The Case of Elijah and the Widow of Zerephath Considered. A Charity Sermon', in *The Sermons of Laurence Sterne: The Text*, The Works of Laurence Sterne, 8 vols (Gainesville, FL: University Press of Florida, 1996), IV, pp. 40–56 (pp. 51–52).

ⁱⁱⁱ Henry Mackenzie, *The Man of Feeling* (London, 1771), p. 53.

^{iv} Janet M. Todd, *Sensibility: An Introduction* (London; New York, NY: Methuen, 1986).

^v Laurence Sterne, *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, The Works of Laurence Sterne (Gainesville, FL: University Press of Florida, 1996), pp. 512–13.

^{vi} Laurence Sterne, 'Philanthropy Recommended' in *The Sermons of Laurence Sterne: The Text*, The Works of Laurence Sterne, 8 vols (Gainesville, FL: University Press of Florida, 1996), IV, pp. 21–30 (p. 29).

^{vii} Sterne, *Tristram Shandy*, p. 239.